

子駁ト號ク、今ノ世マデモ袴ニ繼スル事ヲ忌ル諺ハ、其是緣也ト云ヘリ、光照モ父ノ後世ヲ問タ
メ、終ニ薙髮自不言尼ト法號シテ、栽松寺ニ入レリ、後ニ又山城國山崎ノ邊ニ不言尼寺ヲ草創ス、
當國大願栽松兩寺ノ略記ニ然リ、

〔攝津名所圖會〕三、長柄橋跡、此橋の舊跡古來よりさだかならず、何れの世に架初て、何の世に朽壞

堀出ず事もあり、其所一擧ならず、予これ大江なり、即大江の名もこれより出、又これを難波江、浦
江、曾禰崎より北は神崎川まで一面の大浦なり、其江の中に嶼々多あり、今村里に古名
波入江、難波江の浦、三津江、御津浦とも和歌に詠れたり、其江の口小島等みな水邊の郷名多し、長柄橋
の遺るもの多し、所謂南中島、北中島の間に橋本、紫島、濱川、小島等みな水邊の郷名多し、長柄橋
は孝徳帝豐崎宮の御時より、一橋の名にあらす、皇居への通路なり、今諺云、長柄橋は長サ壹
里ありしと云傳へたり、御時より、一橋の名にあらす、皇居への通路なり、今諺云、長柄橋は長サ壹
よりりてみな長柄橋といひならはし、橋跡といふ、又一説には、長柄川、今の船渡口の邊、橋の古杭遺
豐島郡垂水庄に至るまで、長柄の橋跡といふ、又一説には、長柄川、今の船渡口の邊、橋の古杭遺
の修理も、近年堀出し、江府に上る、長柄の橋跡といふ、又一説には、長柄川、今の船渡口の邊、橋の古杭遺
月、再び長柄橋を造らしむ、人柱は、此時也、後世に、桑田、變じて、海と成る、より、大なる益なり、
江、海みな變じて、田園と成、今の如く、村里、食田多し、桑田、變じて、海と成る、より、大なる益なり、
しか

〔槻の落葉〕難波舊地考

長柄豐崎宮の御跡を考るに、まづ長柄の二字を中古奈賀良と訓來れるは、ひが訓にて、奈賀江と
訓べき也、さるは古事記に、葛木長江曾都毘古とある、長江は、大和國葛上郡の地名なり、天武紀に
は、幸于朝孀、づまれのひがのなさかといへ、仁徳紀の歌に、あさ、以看大山以下之馬於長柄杜と見え、延
喜式神名帳には、葛上郡長柄神社と載られたり、是等を相照らして、柄は元來江の假字なるを知
るべし、さてこの長江といふは、百濟狹山兩河の合て、西の海に入とある、堀江の長きをいふ名
にや、和名抄西成郡に、長源といふ郷名の見えたる源ハ誤字なるべしと攝津志にもいひ、又國人
へり、古圖に、今も北堀江に、長江堤の遺跡もあり、又按に仁徳紀に、爲橋於猪甘津、即號其處曰小
橋也といへるは、今猶味原の東南、彼高津よりは北によりて、東小橋、西小橋とて、其名存せり、古事